

あなたが怒るのは正しいことか

——ヨナ書と「二人の息子のたとえ」における 怒りの比較検討——

大川 大地／長井 隆児
OKAWA, Daichi NAGAI, Ryuji

目次

1. はじめに
2. ヨナ書
 - 2.1. ヨナの怒り
 - 2.2. ヨナの怒りの克服
 - 2.3. 読者の怒りの克服
3. 二人の息子のたとえ
 - 3.1. 兄息子の怒り
 - 3.2. 兄息子の怒りの克服
 - 3.3. 読者の怒りの克服
4. 比較検討
 - 4.1. 共通点
 - 4.2. 相違点
5. おわりに

1. はじめに

本稿は、ヨナ書とルカ福音書に記された「二人の息子のたとえ」（ルカ 15,11-32）を、両方の物語に描かれた怒りの感情に注目し、比較検討

する試みである。⁽¹⁾両方の物語には、とりわけその後半部分（ヨナ4章；ルカ15,25ff）に物語構造上の顕著な類似点をいくつか確認できる。⁽¹⁾両方の物語において神と父親は本来怒るべき相手（ニネベの人々、弟息子）に対して怒^らない。⁽²⁾そのことをきっかけに、物語の主人公たち（ヨナ、兄息子）は怒^る（ヨナ4,1.4.9；ルカ15,28）。そのさい、ヨナがニネベの都を出て東に留まること（ヨナ4,5）、兄息子が弟息子のための祝宴への参加を拒否すること（ルカ15,28）は、主人公たちの怒りの継続を示しているであろう。⁽²⁾その後、両方の物語において主人公たちと神／父親との間の対話が続く。神と父親はどうも主人公の怒りが正当なものではないと彼らを説得しているようである。⁽³⁾両方の物語は、神／父親の説得が成功したかどうかを描かない。すなわち、物語の結末は神／父親の発言で幕を閉じるいわゆる「オープンエンド」である。

両方の物語の後半部分における類似点は、とりあえずは次のことを示唆するであろう。⁽¹⁾両方の物語において、その主人公たちには直接にかかわらない神／父親の行為（ニネベへの災いの思い直し／弟息子の再受容）によって、彼らに怒りが作動する。従って怒りは、神／父親の行為が自分以外の者にもたらした肯定的帰結に対する、主人公たちの否定的反応である。⁽²⁾神と父親の説得は、このようにして生じる怒りを克服すべき感情として提示する。⁽³⁾物語が「オープンエンド」で終わるのは、怒りの克服を読者が引き受けるべきだからである。⁽³⁾

以上に述べた点から、ヨナ書と「二人の息子のたとえ」の比較検討の作業は次の3点に集中する。⁽¹⁾テキストにはそもそもどのような怒りが描写されているのか、物語のストーリー構成は、どのように主人公たちに怒りを発動させるのか。⁽²⁾なぜ主人公たちの怒りは克服されるべきであるのか、神と父親はどのように説得を試みているか。そして、⁽³⁾主人公たちの怒りの描写と、神／父親の説得は、読者を怒りの克服へと導くために、どのように機能するのか。以下、私たちはヨナ書、「二人の息子のたとえ」の順に以上の点を中心に考察し、両者の比較検討を試みる。

2. ヨナ書

ヨナ書において、ヨナの感情は4章になって初めて語られる。それ以前には、感情の描写はヨナ以外の登場人物に限られ（1,5.10.15(?).16; 3,5.10）、ヨナの感情は、感情を指し示す明白な名詞なしに彼の発言の中でのみ描写される（1,9; 2,3-10）。このことについて、A. J. Hauser は次のように述べている。

2章と3章においては減じられたかたちに残るヨナの受動性は、4章における突然のコントラストを準備する。そこではヨナは、罪深いが、悔い改めた町が救われるべきかどうかという問題をめぐり、怒って神と対決するので、少しも受動的ではない。3:10と4:1が共にその書における重要な転換点とみなされる以上、その転換点に来る時に神が突然最も罪深い人々すら赦す神として示されているので、書き手が、突然で思いがけないヨナの性格の反転を、神の性格における同様に驚くべき反転に読者の注意を集中させる一つの手段として使うために、これまでヨナを受動的に描いたことは明らかである。⁽⁴⁾

ヨナの怒りの描写を理解するために、Hauser の言う「重要な転換点」が大きな意味を持つ。すなわち、「怒り」の場面が物語を前進させるために役立っているのである。⁽⁵⁾

2.1. ヨナの怒り

ヨナの怒りは、神がニネベに対して「行くと語った災いを行わなかった」（ヨナ 3,10）後に「突然」に生じる。「このことはヨナにとって大いに不満であり、彼は怒った」（ヨナ 4,1）。従って、ヨナの怒りは神の思い直しという行為に対する否定的反応として描写されている。しかし、ヨナは自身の怒りを説明する際に、ヤハウェの思い直しが予想通りであったとも発言している（ヨナ 4,2）。なぜヨナは、予想通りの出来事に対して怒りを発したのか。そもそも、ヨナの怒りは何によるものなのか。

ヨナの怒りの原因について、これまで様々な提案がなされてきたが、それらはおおよそ次の2つに大別できる。(1) ヨナは、(元)悪人、あるいは異邦人、もしくは(北)イスラエルの宿敵アッシリアの町ニネベが滅びなかったことに怒っている。⁽⁶⁾(2) ヨナは、ヤハウエの思い直しによって自身が被ったないし被るかもしれない不利益に怒っている。⁽⁷⁾これらの想定は必ずしも相互に排他的でなく、ヨナの怒りは複合的な原因が作動したものであるだろう。それにもかかわらず物語の文脈は、ヨナの怒りが自身の被る不利益ではなく、ニネベの悔い改めとヤハウエの災いの思い直しに関連することを強調している。

ヨナの怒りの原因を知るために、怒っているヨナ自身の言葉が私たちに示唆を与える。「ああ、ヤハウエよ。私が私の土地にいる間に言ったのはこのことではないですか。だからこそ (עַל־כֵּן)、私は最初にタルシシュに逃げたのです。なぜなら、私は、あなたが慈悲深く、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、恵みが多く、悪を思い直す者であることを知っているからです」(ヨナ 4,2)。ヨナが自身の土地にいる間に言ったことは、ヨナ書には記されていないが、文脈から、神が「行くと語った災いを行わなかった」(ヨナ 3,10) ことに関連すると推測される。2章のヨナの祈りにおいても、彼はヤハウエの救済的な性格を否定してはいない。彼は、ヤハウエが慈悲深く、憐れみ深い神であって欲しいと望んでいるはずである。ヨナ自身が——「だからこそ」という言葉に示唆されるように——タルシシュへの逃亡の際に、ヤハウエが「災いを行わない」ということをあらかじめ当てにしていた。⁽⁸⁾ どうやら、ヨナにとっては、ヤハウエの慈悲深さ、憐れみ深さ、恵みの多さが発揮されるべき対象がニネベであってはならないようである。

「私が私の土地にいる間に」との発言で、読者の視点は物語冒頭1章1-2節へ戻る(それ以降ヨナは「彼の土地」にいない)。そこでヤハウエはヨナに次のように語っていた。「立ち上がり、大いなる町ニネベに行ってこれに呼びかけよ。なぜなら、彼らの悪(רָעָה)が私の前に上ったからだ」(ヨナ 1,2)。このヤハウエの発言で重要なのは、「大いなる町ニネ

べ」が「悪」と結び付けられていることである。ニネベは、言うまでもなく北イスラエルを滅ぼしたアッシリア(王下17,1-6)の首都であり、ニネベがヤハウエの怒りの対象となりうるという思想はナホム書にも確認できる(特にナホ2,14; 3,5-7参照)。そして、「アミタイの子ヨナ」は北イスラエルの預言者として登場し、神の救済の意志に基づく北イスラエルの繁栄を告げている(王下14,25-27)。つまり、ヨナは、アッシリアに滅ぼされる(／た)北イスラエルの預言者としてヨナ書に登場する。彼にとって、イスラエルの敵は罪深い存在であり、赦されてはならない存在なのである。その際、ニネベの人々の「悪(רָעָה)」は明示されていないが、ニネベの王の布告の中では、人々が「彼らの手の中にあるその悪の道と暴力から(מִדְּרֹכֵי הָרָעָה וּמִדְּהָרָם אֲשֶׁר בְּכַפֵּיהֶם)」立ち返ることが求められている(ヨナ3,8)。ここから、王自身がニネベ内の「暴力(הָרָם)」の存在を認知していたことが窺える。一方で、「暴力」と「悪の道」は並列してあらわれ、これらは両方とも「悪」に包括されうるが、区別されているとも見ることができる。「悪の道」から立ち返ることに言及する並行箇所は、エレミヤ書18,11; 23,22(ただし、מִדְּרֹכֵי הָרָעָה; 26,3; 35,15; 36,7などである。そこにおいて、「悪の道」の意味内容は、「私の民は私を忘れた。彼らは虚しいものに香をたく(לְשׁוֹאָה זָמְרוּ)」(エレ18,15)というヤハウエの言葉から理解することができる。また、エレミヤ書において「悪の道」は、偽預言者の声を聞き、姦淫を行い、偽りに歩み、ヤハウエを侮ること(エレ23,9-17)であり、ヤハウエの言葉に従わずに他の神々に従うことである(エレ35,13-17)。つまり、「悪の道から立ち返ること」とは、「ヤハウエ宗教に(再)加入すること」だと言えよう。そして、エレミヤ書において、それは、ヤハウエが「災い」を思い直す条件として描かれており(エレ18,8,11)、その発想はニネベの王の言葉に反映されている(ヨナ3,7-9)⁽¹²⁾。もしヨナが、ニネベの人々が「悪の道から立ち返ること」が彼らの救済の条件であってはならないと判断したのであれば、彼はニネベの人々の「改宗による救済」を認めていないのである。⁽¹³⁾

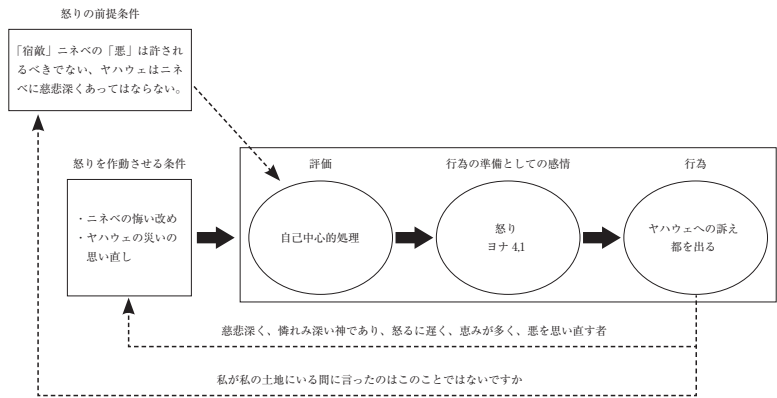


図1 ヤハウェの災いの思い直しによるヨナの怒りの作動プロセス

以上に述べたことから、ヨナの怒りは行為の調整 (Handlungsregulierung) の複雑なプロセスに組み込まれているということが明瞭に意識されねばならない。すなわち、ヨナ 1,1-2 の非常に短い記述から、ヨナの怒りの前提条件として、ニネベがヨナ（と北イスラエル）の宿敵であり、その宿敵の「悪」にヤハウェは無慈悲に災いを下して当然であるということを読み取ることができる。しかし、ヤハウェはこの災いを思い直す（怒りを作動させる出来事）。上述の前提条件に照らして、この出来事はヨナに否定的に評価される。その評価がヨナに怒りの感情を作動させ、それが具体的な行為（神への発言と、都を出るという行動）を準備する⁽¹⁴⁾。ヤハウェの第1の問いかけ——「あなたが怒るのは正しいことか⁽¹⁵⁾（הֲיִטֵּב תִּרָּה לָךְ）」——が示唆するように、ヨナはこのように作動する怒りを克服すべきである。しかしながら、ヨナの発言は、怒りの前提条件、怒りを作動させる出来事⁽¹⁵⁾にのみ向かう（図1を参照）。従って、ヨナはヤハウェとの対話なしに怒りを克服することはできない——それなしには、怒りのプロセスが繰り返されるだけだからである。

2.2. ヨナの怒りの克服

その後の物語において、ヤハウェはトウゴマの木を備え、ヨナの日陰

とした(ヨナ4,6)。これをヨナは喜ぶ(ヨナ4,6)。しかし、神は翌日の夜明けに虫を備えることでトウゴマの木を枯らし、太陽が昇った時に焼けつくような東風を備える(ヨナ4,7-8)。そして、太陽がヨナの頭の上を打つと、弱り果てた彼は再び「私の死は私の生より良い(טוב מוֹתִי מַחְיֵי)」と述べる(ヨナ4,8)。ここでヨナには上に確認した行為の調整としての怒りのプロセスが再び作動している(図2を参照)。

興味深いことに、ヤハウエはトウゴマの木をニネベの人々(と動物)に重ねている。このことは、おそらくヨナ書の最大のメッセージと思われる、ヤハウエの次の言葉に明らかである。「あなたはあなたがそれによって働いたのでもなく、一夜で起こり、一夜で滅びた、育てたのでもないトウゴマの木を憐れんでいる。まして、私は、その右と左の間の区別ができない12万よりも多くの人と、多くの動物がいる大きな町ニネベを憐れまないだろうか(וְלֹא גִדַּלְתָּ בּוֹ אֲשֶׁר לֹא-עָמַלְתָּ בּוֹ לִלְבָּא הָהָא וּבִרְ-לִלְבָּא אֲבָד: וְאֲנִי לֹא אֲחֻסּוּס עַל-יְמִינָהּ הָעִיר הַגְּדוֹלָה אֲשֶׁר יִשְׁבָּהּ הָרַבָּה מִשְׁתִּמִּשׁ-עֲשָׂרָה לִלְבָּא אֲדָם אֲשֶׁר לֹא-יָדָע בֵּין-יְמִינִי לְשִׁמְאֹלִי וּבֵהֶמָּה רַבָּה:)」(ヨナ4,10-11)。トウゴマの木はヨナが「それによって働いたのでもなく、一夜で起こり、一夜で滅びた、育てたのでもない」ものであった。そして、12万よりも多いニネベの人々は「その右と左の間の区別ができない」存在である。ヤハウエは、ニネベの人々を優秀だと考えていたわけではなく、イスラエルの人々のように自身が手塩にかけて育てた人々と考えていたわけでもない。しかし、トウゴマの木が「あった／起こった(הָיָה)」ように、ニネベの人々と動物は「ある(יָשָׁ)」のである。つまり、ヤハウエは、「存在している」ことがすでに憐れみの対象となりうると告げている——このことをヤハウエは、トウゴマの木を用いて実演的に、再びヨナに怒りの感情を作動させることで示す。すなわち、ヤハウエは「トウゴマの木[が枯れたこと]のゆえにあなたが怒るのは正しいことか(הֲיֵטֵב תִּקְרָה-לָּךְ)」とヨナに尋ねる。つまり、「トウゴマの木のゆえに」という言葉によって怒りを作動させる出来事が特定されたうえで、先ほどの質問(ヨナ4,4)が繰り返される。これに対し、ヨナは「死に至るまで私

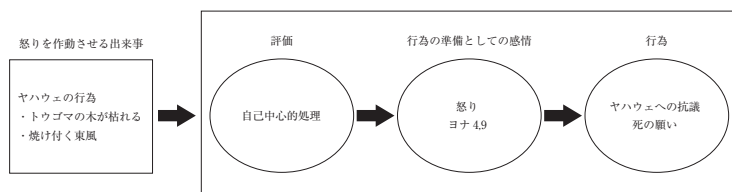


図2 枯れたトウゴマの木によるヨナの怒りの作動プロセス

が怒るのは正しいことです (הֵיטֵב תְּרַדְּלִי עַד־מָוֶת)と返答する (ヨナ 4,9)。ヨナは自身の怒りの正当性を認めているわけである。ここにヨナの怒りの克服の道筋が示される。トウゴマの木〔が枯れたこと〕のゆえに——つまり、ニネベが減びることに——怒るのは正しい。その町には「12 万よりも多くの人と、多くの動物がいる」のであるから。このヤハウエの実演によって、ヨナには次のことが納得されるであろう。すなわち、ニネベが減びなかったことに怒るのは正しいことではない。

補論 神の怒りの克服

興味深いことに、物語においてヤハウエは、ニネベに「右と左の間の区別ができない 12 万よりも多くの人と、多くの動物がいる」ということを認知し直しているように見える。なぜなら、もし「存在していること」がニネベを減ばさない理由であるならば、そもそもヨナをニネベに遣わす必要がないからである。ニネベの人々の悔い改めがヤハウエの認識に変化を与えたと考える方が自然である。神 (הָאֱלֹהִים) は、「彼らに行くと語った災いを思い直した／悔いた⁽¹⁷⁾ (וַיִּנָּקֶם הָאֱלֹהִים עַל־הַרָעָה אֲשֶׁר־דִּבֶּר לַעֲשׂוֹת־לָהֶם) (ヨナ 3,10)。つまり、ニネベの人々に対して「悪の道から立ち返った」という評価を下した後、神の心は動かされるのである。

「行くと語った災いを思い直した／悔いた」神は、それを行わなかった (ヨナ 3,10)。ヨナ書の物語では、「悔い」という感情が「災いを行わない」という行為に結びついているのである。「行くと語っ

た災いを行わない」ということは、神が自身の言葉を実行しないという点で異常である。「災いの思い直し」の神への要求とその実践という図式は旧約聖書において見られる(出 32,12,14)。しかし、「彼は行わなかった(נִשְׁכַּח)」という言い方によって、神が計画した⁽¹⁸⁾災いを取りやめることを表現するのは極めて独特である。「彼は行わなかった」は、ニネベの人々に対する神の「救済」の意志、すなわち、災いの「思い直し／悔い」がもたらす行為とされているのである。これは、「克服の行為」となりうる。様々な災いの告知がなされてきたイスラエルという神の民にすら使われたことのない表現 נִשְׁכַּח によって、異邦人であるニネベの人々への災いの取りやめが語られているのである。本来赦されるはずがなかったニネベの人々の「悪」を、「ニネベの人々の悔い改め」がもたらした一連のプロセスにおいて神が克服したのである。もし、本当にこのことをヨナが不本意ながらも予想していた(ヨナ 4,2)のであれば、少なくともこの点において彼は本当に偉大な預言者として数えられるべきであろう。

2.3. 読者の怒りの克服

前述のように、ヨナ書におけるヤハウエの最後の問いは、開かれている(ヨナ 4,10-11)。つまり、その問いは読者に向けられている。S. T. Mannによれば、第一の祈り(ヨナ 2,3-10)によって読者はヨナと自身を同一視するようになる。⁽¹⁹⁾この分析が正しければ、この祈り以降、読者はヨナに感情移入することになり、ヨナ書の最後にあるヤハウエの問いは効果的に読者に向かうこととなるだろう。

ヨナがヤハウエから逃亡するので、1章において読者はヨナと自身を同一視しづらい。⁽²⁰⁾しかし、——「ヨナ」(とヤハウエ)以外の登場人物たち(船員たち、船長、ニネベの人々、ニネベの王、大臣)の名前が記されていないのであるから——読者はいつの間にかヨナの視点で物事を考えるようになってしまう。このようなヨナ書の文学的な戦略は、ヨナ書

のメッセージ性を強化すると言える。読者は（部分的に）問題のある主人公と一体化するのである。しかし、ヨナの怒りは、その理由が明示されていないため、読者には完全に理解しえないように描かれている（それゆえ、怒りの理由には多様な解釈が生じている）。また、1章のヨナの逃亡を思い起させる言葉（ヨナ 4,2⁽²¹⁾）は、読者を第一の祈り以前の状態、すなわち、自身とヨナを同一視しづらい状態に戻す。それゆえ、ヨナは滑稽な人物という解釈すらありえる。⁽²²⁾しかし、矛盾する状態に読者を導くこと、すなわち、「ヨナと一体化させること」と「ヨナから離れさせること」の両立こそが読者の「無意識的な怒り」を浮き彫りにするための文学的な装置なのである。

ヨナの問題性は、民族や国家の差異に注目してしまい、「存在」という根本的な視点が欠けていた点である。前述のように、ニネベの「存在」を再認識したヤハウェは、ニネベの人々・動物と、ヨナが惜しんだトウゴマの木を重ねることで、「海と陸をつくった、天の神ヤハウェ」（ヨナ 1,9）の、つまり創造神のニネベの人々と動物への「憐れみ」の感情をヨナに告げる。このことによって、ヨナだけでなく、読者にも、神の「憐れみ」の感情が伝えられる。

ヤハウェの最後の問いに対するヨナの返事は記されていないが、テキストの意図としては、「あなたはニネベを憐れむ（תְּחַסֵּם עַל-נִינְוָה）」という返答が期待されているであろう。これは読者にも期待される返答である。⁽²³⁾つまり、この問いは「ヨナ」が「読者」の中にいるということを伝える。⁽²⁴⁾

この物語は意図的にオープンエンドにされており、ちょうど放蕩息子のたとえにおいて兄への訴えが実際にはイエスの時代の宗教的俗物に向けられていたように（ルカ 15:2, 31, 32）、聞き手たちは物語の実存的な課題に直面させられる。⁽²⁵⁾

L. C. Allen が見出した「二人の息子のたとえ」（放蕩息子のたとえ）と

ヨナ書の繋がりに関する指摘は、本稿の2章と3章を繋ぐのに相応しい言葉と言えよう。

3. 「二人の息子のたとえ」⁽²⁶⁾

ルカ福音書15章11-32節に記されたたとえ話は、『放蕩息子』のたとえ(新共同訳の小見出し)や、『失われた息子』のたとえ(聖書協会共同訳の小見出し)と呼ばれてきた。しかし物語は、「放蕩息子」あるいは「失われた息子」の帰還を喜びで迎え入れる父親の姿を描いて終わるのではない。ルカ15,25以降、父親の喜びを共有しようとしない兄息子が物語に登場する(ルカ15,1-6. 8-9のたとえ話が「共に喜んで下さい」という発言で終わることに注意)。従って、このたとえ話は「放蕩息子」あるいは「失われた息子」にのみ関心を持ったたとえ話なのでない。そのことはすでにたとえ話の冒頭の言葉に示唆される(ルカ15,11「ある人に二人の息子がいた(εἶχεν δύο υἱούς)⁽²⁷⁾」)。

3.1. 兄息子の怒り

これまで存在が示唆されるだけであった兄息子は、弟息子の帰還を父親が受け入れた時に、その場に不在であった。彼は、その時「畑にいた」(ルカ15,25)のである。従って、25節は息子の家への帰還をめぐるその前後に対照を生み出すための分岐点として機能している。すなわち、兄息子が畑から帰還した時、父親はその場に不在であった。「あらゆる事が家の中で行われており、音は遠くまで聞こえる。語り手が意図しているのは、兄息子が帰還した際に、彼が気づいた溢れんばかりの雰囲気を描くことである⁽²⁸⁾」。こうして喜びの音楽は、不穏な音色へと変わる⁽²⁹⁾。すでにこの時点で、「まだ遠く離れていたのに」(15,20)弟息子の帰還を喜んだ父親の姿と、遠く離れた畑から兄息子が帰還したときにその場に不在であった父親の姿を比較することのできる読者は、兄息子に喜びと正反対の感情が発動することを予想できる——「騒々しい祝宴が兄息子の怒りを作動させる⁽³⁰⁾」。兄息子もすぐさま、僕からの報告によってこの

比較の視点を獲得するであろう（15,27「あなたの弟が帰ってきました。彼を無事な姿で迎えたというので、父親は……」⁽³¹⁾）。しかも僕は（おそらくは語り手によって意図的に）、兄息子にことの次第を正確に伝えていない。兄息子は、弟息子が父親の前でその罪を告白したということ（ルカ 15,21）⁽³²⁾を聞いていない。

すでに多くの学者が指摘してきたように、「兄息子の怒りは、弟息子と比べて自身が不当に扱われているという認識を反映している」⁽³³⁾。彼は、弟息子とは対照的に何年もの間父親に仕えてきたが、祝宴を開いてもらったことがなく（ルカ 15,29）⁽³⁴⁾、父親は彼を出迎えもしない。従って、兄息子は父親の行為を評価するための前提条件として、父親は公正でなければならないと考えているのである——間違っても、放蕩の限りを尽くして戻ってきた弟息子を、息子と認めるようなことがあってはならない。この兄息子の前提条件を読者はすでにたとえ話の前半部から理解できる。すなわち、自身の放蕩によって生を脅かすような状況を自らに引き寄せた弟息子自身が次のように言っている。「もう息子と呼ばれる資格はありません」（ルカ 15,19. 21）。しかも弟息子は、通常父親の死後に相続される財産を父親の生前に願ひ出ている⁽³⁵⁾。このような者の生還を共に喜ぶべき正当な理由などない。すでにアリストテレスが次のように言うとおりである。「そうなるべきではない者が不幸にあるのを見て心を痛める者は、それとは反対に、そうなるべくして不幸になった者に対しては、悦びを感じるか痛みを感じない。たとえば、父親殺しや殺人者の場合、彼らがその報いを受けても、誠実な者でそれに痛みを感じるものはいない」（『修辞学』1386b）。こうして兄息子がその弟の帰還を祝う祝宴に参加することを拒否することも、真偽のほどが定かでない情報で弟息子を侮辱するのも読者には納得のいくことなのである。「あなたの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身代を食い潰して帰還すると…」（ルカ 15,30）——弟息子が娼婦と共にいたという情報はたとえ話の前半部に語られておらず、もはや兄息子にとって弟息子は「弟」ですらない⁽³⁶⁾。

以上に述べたことから、兄息子の怒りは、ヨナの怒りと同様に、行為

の調整のプロセスに組み込まれていることが分かる。父親は弟息子の帰還を受け入れる（怒りを作動させる出来事）。しかし、父親は公正であるべきだという前提条件に照らして、兄息子はこの出来事を否定的に評価する。こうして兄息子に怒りが作動し、それが具体的な行為（祝宴の拒否、父親との論争、弟息子に対する侮辱）を準備する⁽³⁷⁾。兄息子の視点も、怒りを作動させる出来事にのみ向かう。従って、ヨナの場合と同様に、兄息子も父親との対話なしにはこの怒りを克服する道を見出すことができない。

3.2. 兄息子の怒りの克服

兄息子は祝宴への参加を拒否し、そこで父親が息子のもとへやって来た（ルカ 15,28）。対話の前に語られるこの短い言及が、すでに弟息子に比べて兄息子が不当に扱われてなどいないということを納得させるための準備である。語り手は、僕が父親に兄息子が怒って家に入ろうとしないということを知らせたという描写を省いている⁽³⁸⁾。すなわち父親は、自分自身で遠く離れた弟息子を認め、そこに走り寄ったのと同様に、兄息子のもとへ登場する——自身が公に開催した祝宴への参加を拒否するという「父親に対する侮辱」の行為をなす兄息子のもとへ。父親はまず、兄息子を不当に扱っていないということを彼に納得させようとする。「子よ、あなたはいつも私と共にいる。私のものは全てあなたのものだ」（ルカ 15,31）。しかし、弟息子を父親が受け入れたことによって兄息子に怒りが作動している以上、兄息子を不公平に扱っていないという論拠だけでは彼の怒りは克服されない。そこで父親は、怒りを作動させる出来事の評価の仕方を変えるように兄息子を招くのである。すなわち、父親は自身が弟息子の帰還を肯定的に評価したということを語る。「喜び祝うことは当然ではないか、何故ならあなたのこの弟は死んでいたのに生き返り、失われていたのに見つかったのだから（εὐφρανθῆναι δὲ καὶ χαρῆναι ἔδει, ὅτι ὁ ἀδελφός σου οὗτος νεκρὸς ἦν καὶ ἔζησεν, καὶ ἀπολωλὼς καὶ εὗρέθη）」（ルカ 15,32. cf. 15,24）。この肯定的評価が父親に喜びの感情を

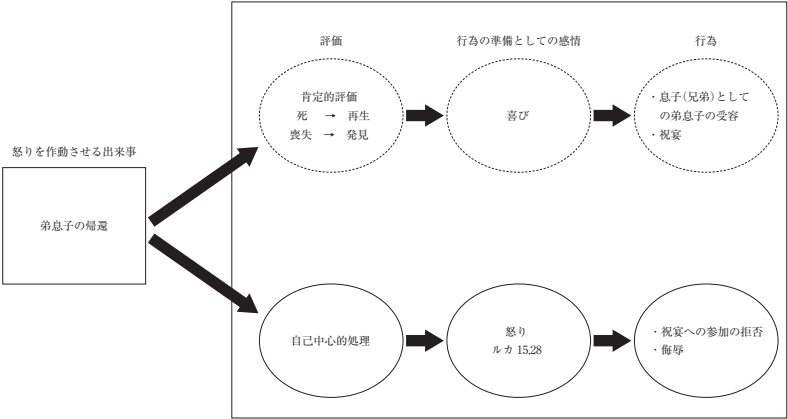


図3 「二人の息子のたとえ」における喜びと怒りの作動プロセス

作動させ、それが父親のあるべき姿の常識に逆らってまで弟息子を息子として受け入れさせ、祝宴を開くという行為の準備となった⁽³⁹⁾。ここに兄息子の怒りの克服の道筋が示される。「まさに危機的な状況の中で兄息子にこの共なる喜びを理解可能なものとするために、父親はこの批判的な論争において、感情の行為を刺激する価値付けを説明しているのである⁽⁴⁰⁾」。出来事を評価する仕方を変更することが、兄息子に「ともに喜ぶ」という仕方で怒りを克服する可能性を開く（図3を参照）。

3.3. 読者の怒りの克服

上述のように、25節以降読者は、兄息子と弟息子を比較し、父親のあるべき姿について兄息子の前提条件を共有する。読者が兄息子と前提条件を共有する仕方について、A. Inselmann は次のように言う。

兄息子は、弟息子のだらしな振る舞いにはそれ相応の報いがあるべきだと考えているのである。それゆえに彼の論拠は非難の中で頂点に達する——その財産を食い潰した者に、父親は肥えた子牛を屠って与える（ルカ 15,30）。このように条件づけられた父親のふる

まいが兄息子のこれまでの経験とは相容れないものであるので、兄息子は怒りを現実化させるわけである。……〔弟息子の〕不道德な生き方への言及でもって、読者の関心と注意は再び弟息子の罪にまみれたふるまいに結びつき、こうして兄息子の怒りが〔読者に〕より良く追体験可能なものとなる。⁽⁴¹⁾

Inselmann がさらに続けて言うように、ルカ 15,1f の枠組みは、イエスのたとえ話として語られる物語内物語が、物語の内部ですでに徴税人、罪人、ファリサイ派、律法学者たちといった聴衆に転用されることを示唆している。⁽⁴²⁾

興味深いことに父親の最後の問いかけは、事柄的には⁽⁴³⁾ *sachlich* 明らかに兄息子を祝宴に招く発言であるにもかかわらず、文法的には⁽⁴⁴⁾ *grammatisch* 喜び祝うべき主体が曖昧である（「喜び祝うこと、そのことは当然ではないか」）。しかし、この非人称的な形式は、物語がこの発言で開かれた状態で終わることによく合致している。すなわち、祝宴への父親の招きは、兄息子に共感し、その前提条件を共有する（内的）読者に対する招きでもある。ヨナ書の場合と同様に、読者は「無意識的な怒り」に気づかされ、その克服を迫られるのである。

4. 比較検討

4.1. 共通点

ヨナ書と「二人の息子のたとえ」の主人公たちの怒りの描写は私たちに次のことを示す。すなわち、両方の物語において、(1) 主人公たちの怒りとは、神／父親の行為をある前提条件に照らして否定的に評価することで作動する感情である。ヨナにとって、宿敵たるニネベはヤハウエに許される存在であってはならず、兄息子にとって、放蕩の限りを尽くした弟息子を父親が息子として受け入れるなどということがあってはならない。両方の物語は、読者がこの前提条件を主人公たちと共有するように文学的仕掛けを用いている。しかし神／父親は、主人公たち（と読

者)の前提を、すなわち神／父親のふるまいに対する期待を裏切る仕方で行為する。ヤハウエはニネベへの災いを思い直し、父親は弟息子に一番良い衣を着せ、手に指輪をはめてやることで、息子として彼を受け入れる。その際、怒る主人公たちは、怒りを作動させる出来事にのみ目を向ける。こうして主人公たちの怒りのプロセスは堂々巡りに陥る。従って、両方の物語において、(2)主人公たちの怒りの克服は、神／父親との対話の中で怒りの克服の仕方の新しい視点を学ぶことの中でのみ達成されうる。神／父親は主人公たちに「常識」的な発想を超えた、「存在」への視座を伝える。ニネベが存在していることは救済に値するのであり、失われた弟息子が帰還し、今、共に存在していることは喜びに値するのである。この対話が神／父親の発言で終わる「オープンエンド」の形式を採用するのは、(3)「無意識的な怒り」を抱く読者が物語の主人公たちに学ばれた怒りの克服の仕方の新しい視点を追体験するためである。

4.2. 相違点

しかし、ヨナ書と「二人の息子のたとえ」には相違点も認められる。(1)読者が主人公たちと前提条件を共有するための文学的仕掛けに違いがある。一方において、ヨナは(明示的には語られないものの)明らかにニネベの人の悔い改めを目撃しているが(ヨナ4,5までヨナは都の内に留まっている)、他方で兄息子は弟息子の罪告白を聞いておらず、僕の報告は(意図的に)このことを兄息子に伝えていない。この違いは、しかし、それぞれの書において読者が主人公たちと怒りを共有するために役立っている。ヨナにとって、宿敵ニネベはたとえ悔い改めでも救われるべきではなく、兄息子にとって、悔い改めもなしに帰還した弟息子は、真偽の定かでない情報によって罪と結び付けられ侮辱されるに値する存在である。

(2)二つの物語には、神／父親によって提案される怒りの克服の仕方に違いがある。ヨナ書においてヤハウエは、トウゴマの木を用いて、実演的にヨナに再び怒りを作動させることによって、怒りの克服の仕方を

提示する。すなわちヤハウエは、怒りを作動させる出来事を変える。このことの意味は、トウゴマの木がニネベに重ねられていることが理解されたときに明らかになる。トウゴマの木が枯れるように、ニネベが減びることに怒ることは正しい。そこには一本のトウゴマの木以上に価値のある無数の人々と動物が存在しているのだから。従ってニネベが減びなかったことに怒ることは正しくない。ヤハウエは、明示的に語られるニネベが減びなかったという出来事と、暗示的に語られるニネベが減びるという出来事の、二つの正反対の出来事によってヨナの怒りを作動させ、第1の出来事に対する前提条件と評価の「思い直し」をヨナに求める。これに対して、兄息子の父親が変えるのは、怒りを作動させる出来事ではなく、同一の出来事の評価の仕方である。「二人の息子のたとえ」は、出来事の評価が変わることによって、「喜び」と「怒り」という正反対の感情が作動することを明示的に示す。兄息子は父親の最後の言葉によって、「喜び」の感情の作動するプロセスを学ぶ——出来事の肯定的評価は「喜び」の感情を作動させ、それが祝宴への参加という具体的行為に結びつく。従って自身の前提条件(「当然」)を兄息子は再考せざるを得ず、彼には「喜び祝うのは当然」という父親の論拠を説得的に聞く可能性が残されている。

5. おわりに

いずれにせよ、両方の物語に描かれた登場人物の怒りとその克服に至る一連のプロセスから、ひとつの抽象的モデルを抽出することができる(図4を参照)。すなわち、感情とは、ある出来事がある前提条件に従って評価されることによって生じる行為の調整のプロセスである。ヨナ書と「二人の息子のたとえ」は、物語の主人公の怒りの描写を通してこの一連のプロセスを読者に対してひとつのモデルとして提示している。その際、両方の物語は、怒りの克服の失敗と成功の可能性を同時に描く。怒りが作動した後に作動因としての出来事にのみ焦点を合わせる仕方では、怒りは行き詰りに結びつく。怒りの克服のためには、出来事にのみ

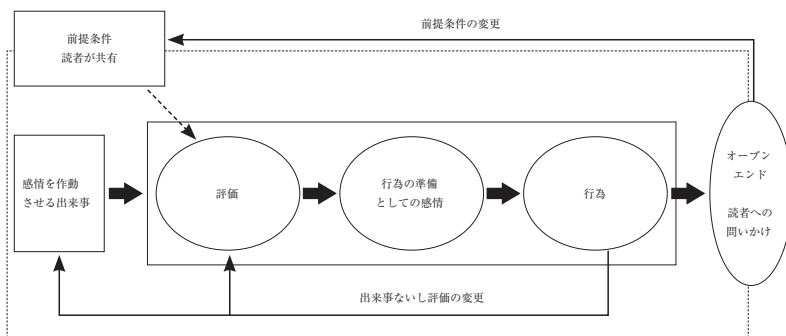


図4 ヨナ書と「二人の息子のたとえ」における感情の生起とその克服のモデル

焦点を合わせる仕方とは別のやり方を学ぶ必要がある。このように抽出される抽象的モデルは、主人公たちと——さらにはその物語の「作者」が念頭に置く「実際の読者」と——時代的、文化的状況を共有しない「読者」が、物語に描かれた怒りのプロセスを、自身の「実存的な課題」(Allen)にとって有意義なものとして適用することが可能であることを示唆する。読者が物語の主人公と共有するのは、出来事を評価するための前提条件と、「オープンエンド」のかたちを採る主人公への問いかけである。神／父親の問いかけを自身に対する問いかけとして聞くことのできる読者は、神／父親が物語内で提示する怒りの克服のやり方を自身に適用することができるであろう。こうして読者は、自身の前提条件を変更するすべを学ぶのである。読者は、「物語」の中で現実と距離をとって、自身の無意識的な感情を認知的な次元に高めることができる。

怒りの感情に注目したヨナ書と「二人の息子のたとえ」の比較検討が私たちに示すのは、聖書の物語と現代の読者の間には、時代的・文化的に大きな隔たりがあるという（それ自体は正当で有意義な）懐疑に対する、別の読書行為の可能性である。アリストテレスの言う「そうなるべくして不幸になった者に対して感じる悦び」は、そして同じことではあるが、不幸になるべきだと自分に思われる者が不幸にならなかったこと

に対する怒りは、人生と日常生活のあらゆる局面で生じうる。しかし、日常において人はしばしばそのことに無自覚である。ヨナ書と「二人の息子のたとえ」の二つの物語は、「無意識的な怒り」を抱えている読者が、「他人の不幸に対する喜び」(Schadenfreude)を「共なる喜び」(Mitfreude)へと変えるための有意義な道しるべである。

〈付記〉本稿は、大川と長井の共同執筆というかたちで発表されるが、実際の作業としては両者が分担して執筆したものを組み合わせてひとつの論文のかたちにしたものである。具体的にはそれぞれの専門領域に応じて大川が1、3、4章を、長井が2、5章を主に執筆した。しかし、それぞれの執筆したものをお互いに読み合わせ、修正し合ったので、論文全体に対する責任を両者が等しく負うものとする。なお、大川は2019年8月に語学研修のためにドイツ・アウグスブルクを訪れた折に、アウグスブルク大学のペトラ・フォン・ゲミュンデン教授より、ルカ福音書の注解書を含め、本稿執筆のための多くの有益な文献を教示して頂いた(その一部を長井と共有することもできた)。記して心から感謝するものである。Da Prof. Petra von Gemünden nicht Japanisch liest, schreiben wir hier auf Deutsch. Für ihre Literaturhinweise sei ihr herzlich gedankt! Dank ihrer Ermutigungen haben wir diesen Artikel schreiben können.

Zusammenfassung

Meinst du, dass du mit Recht zürnst?:

Versuch eines Vergleichs der Zorndarstellungen im Buch Jona und der Parabel von den zwei Söhnen (Lk 15, 11-32) mit Hilfe der kognitiven Emotionstheorie

Die Jona-Erzählung im Alten Testament und die Parabel von den zwei

Söhnen im Lukasevangelium weisen insbesondere im letzten Teil (Jona 4; Lk 15,25ff) einige bemerkenswerte Ähnlichkeiten auf. a) In beiden Erzählungen ärgern sich Gott bzw. der Vater nicht über die Menschen, über die sie sich eigentlich ärgern sollten (die Bewohner von Ninive, den jüngeren Sohn). Dies führt dazu, dass die Protagonisten der Erzählungen (Jona, der ältere Sohn) sich ärgern (Jona 4,1.9; Lk 15,28). b) In den Erzählungen folgt dann ein Dialog zwischen dem jeweiligen Protagonisten und Gott bzw. dem Vater. Sowohl Gott als auch der Vater scheinen den jeweiligen Protagonisten davon zu überzeugen, dass sein Zorn nicht gerechtfertigt ist. c) Die erfolgreiche Überwindung des Zornes der Protagonisten wird nicht beschrieben: Das Ende beider Erzählungen bleibt „offen“, da die Szene durch die Äußerungen von Gott bzw. vom Vater beendet wird. Dies bedeutet, dass es die Aufgabe des Lesers ist, den Zorn zu bewältigen. Durch diesen Befund stellt sich die Frage, wie der Zorn in den beiden Texten dargestellt wird, wie die Protagonisten ihren Zorn überwinden können und wie der Leser ihn durch das Lesen bewältigen kann.

Dieser Artikel vergleicht Zorndarstellungen und Überwindungsweisen des Zorns in den beiden Texten mit Hilfe der kognitiven Emotionstheorie. Die Theorie weist darauf hin, dass der Zorn in beiden Texten als ein kognitiver Vorgang dargestellt wird: die Protagonisten bewerten bestimmte Ereignisse gemäß ihren Wertmaßstäben kognitiv, urteilen einseitig negativ und die negative Bewertung löst den Zorn aus. Diese Bewertungen—die böse Stadt Ninive sollte von Gott vernichtet werden, der verlorene Sohn sollte von seinem Vater nicht akzeptiert werden—kann der Leser leicht nachvollziehen. Dabei können die Protagonisten und der Leser den Zorn nicht überwinden, weil sie sich nur auf die Ursache ihres Zorns konzentrieren: Der Dialog mit Gott bzw. dem Vater kann daher helfen, den Zorn zu überwinden bzw. zu bewältigen. In beiden Erzählungen bieten Gott bzw. der Vater jeweils unterschiedliche Lösungen an. Im Buch Jona

verändert Gott Jonas Wahrnehmung durch ein zusätzliches Ereignis. Er vergleicht die Stadt Ninive mit einer Staude : Wenn Jonas Zorn über das Verdorren der Staude gerechtfertigt ist, dann hat er kein Recht, zornig zu sein, weil Ninive verschont wurde (Jona 4, 9-11). In der Parabel verändert der Vater die Bewertungsweise des Ereignisses: Der Vater kann sich über die Rückkehr des verlorenen Sohnes freuen, weil er sie positiv bewertet (Lk 15, 32).

Aus dem obigen Vergleich lässt sich schließen, dass die psychologische Auslegung mit Hilfe der Emotionstheorie heutigen Lesern helfen kann, Zorn und Strategien zu seiner Bewältigung in der Distanz der Erzählung kognitiv zu erkennen. So wie die Protagonisten durch den Dialog mit Gott bzw. dem Vater gelernt haben, ihren Zorn zu überwinden, so können Leser im Dialog mit biblischen Erzählungen lernen, ihren eigenen Zorn zu bewältigen.

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おおかわ・だいち) /

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程前期課程在学 なかい・りゅうじ)

注

- (1) F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas: Lk 15,1-19,27*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2001, p. 51 に、「二人の息子のたとえ」における兄息子の怒りとヨナ書を含む旧約の登場人物の怒りの非常に短い比較がある。
- (2) 「二人の息子のたとえ」における父親は、明らかに神の役割を演じている。H. Klein, *Das Lukasevangelium*, KEK 1/3, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 2006, p. 532 を参照。
- (3) 私たちがここで言う「読者」とは、物語批評が言うところの「含意された読者」のことである。つまり、私たちは本稿において、私たちが扱うテキストが、理念的な読者にどのように怒りの克服の方法を示すのか、その効用を一つの理念型として抽出し、それを比較検討したいのである。従って、ヨナ書ならびにルカ福音書のテキスト外部に存在した「実際の読者」の再構成には基本的には取り組まないが、現代の実際の読者について第5章で短く言及する。
- (4) A. J. Hauser, “Jonah: In Pursuit of the Dove.” *JBL* 104 (1), 1985, p. 23.
- (5) M. Michael, “Anger Management and Biblical Characters: A Study of Angry Exchange among Characters of Hebrew Narrative.” *Old Testament Essays* 28 (2), 2015, p. 473.
- (6) J. Limburg, *Hosea – Micah: Interpretation: A Bible Commentary for Teaching and Preaching*, Atlanta: John Knox, 1988, p. 154; L. C. Allen, *The Books of Joel, Obadiah, Jonah and Micah*, Grand Rapids: Eerdmans, 1976, p. 227 を参照。これと類似した意見として次のようなものがある。①ヨナにとってヤハウエは異邦人と正の関係を持つ神であってはならない（志村真「ヨナ書の文学的構造とその主題」、『神学』44（1982年）、160頁）。②ヨナは世界における彼の召命と使命の意味に絶望したのであり、ヨナの怒りは慈悲によってイスラエルの無慈悲な敵の方に身を置く神に仕えることに意味はないという声（マラ3,14ff 参照）の代表である（H. W. Wolff, *Dodekapropheten 3: Obadja und Jona*, BKAT XIV/2, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1977, pp. 139-141）。③ヨナは因果応報的な思想が異邦人に実行されないことと、神が「改心」して悪の象徴であるニネベの人々を救ってしまうこと（「イスラエルの神の可変性」）に怒っている

(加藤愛美「物語論的方法を用いた『ヨナ書』解釈のひとつの試み——スタイル、観点、プロットの分析を通して」、『カトリック研究』85(2016年)、35-38頁)。(4)ヨナは神の怒りを凌駕する神の悔いという知識を、「ニネベ」というイスラエルを苦しめた権力と共有したくなかった(J. Jeremias, *Der Zorn Gottes im Alten Testament: Das biblische Israel zwischen Verwerfung und Erwählung*, BthSt 104, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2011, pp.154-156を参照)。

- (7) ①ヨナは自身の預言が実現せず、偽預言者とみなされうること怒っている(A. Schellenberg, “An Anti-Prophet among the Prophets? On the Relationship of Jonah to Prophecy.” *JSOT* 39 (3), 2015, p. 359; 土岐健治『ヨナのしるし——旧約聖書と新約聖書を結ぶもの』一麦出版社、2015年、153頁を参照)。②ヨナは自身が振り回されたことに怒っている(ヨナの怒りの原因について、大川がある友人に尋ねた際の回答)。③ヨナはヤハウェに欺かれ、神の信頼を失ったと感じ、絶望した(西村俊昭『ヨナ書注解』日本基督教団出版局、1975年、99頁)。④ヨナにとって神の慈悲は掟の権威を疑問視し、罰の信頼性を破壊するので、過剰だけでなく、有害である(U. Simon, *Jona: Ein jüdischer Kommentar: Mit einem Geleitwort von Erich Zenger*, Stuttgart: Verlag Katholisches Bibelwerk GmbH, 1994, p. 122)。さらには、P. P. Jenson, *Obadiah, Jonah, Micah: A Theological Commentary*, NY/ London: T & T Clark, 2008, p. 83を参照。「私自身の仮の提案は、ヨナは神が憐れみ深いだけでなく、公正でもあることを認知したということである。意見の不一致は、これが特定の事例でどのようになるか、である。なぜヨナはニネベへと送られたのか、なぜイスラエルやその他の場所における別の悪しき町ではなかったのか。神が自身の所有物を主権を持って扱うということは、人間には隠されており、ヨナにとっては不快なことなのだ」。
- (8) Jeremias, *op. cit.*, p. 156.
- (9) ただし、ニネベが首都となったのは紀元前7世紀であり、北イスラエルが滅亡したのは紀元前722年である。このような歴史的な整合性のなさは、ヨナ書がニネベの滅亡よりも遥かに後の時代、すなわち、捕囚後に成立した根拠とされる(Wolff, *op. cit.*, p. 55)。ちなみに、ヤロブアム二

世の時代のアッシリアの首都は「カラク（ニムルド）」である。しかし、物語として読む場合、このような歴史的な矛盾は大きな問題ではない。

- (10) 水野隆一『『いつくしみとあわれみの神』：ヨナ書におけるヤハウェの描かれ方』、『神学研究』62（2015年）、1-2頁。
- (11) Wolff は創 6:5.11.13 における רעהו וחמס 結びつきを見出している（Wolff, *op. cit.*, p. 128）。
- (12) ただし、ニネベの王の言葉では「ヤハウェ」ではなく、「神」の言葉が用いられている。3,5 のナレーターの言葉においても「ヤハウェ」ではなく、「神」の語が使用されている。このことについて Jenson は、「ヨナのミニマリスト的な宣言がニネベの人々に対して、ヤハウェの特有な性格の大まかな認識すら不可能にしたので、ヤハウェというイスラエルの名前ではなく、一般的な『神』という言葉を使用することは適切だ」（Jenson, *op. cit.*, p. 75）と述べる。
- (13) 興味深いことに、ヨナは船員たちにはヤハウェの名を伝えている（ヨナ 1,9）。そして、間接的にはあるが、ヨナの「宣教」は船員たちをヤハウェ宗教に導いている（ヨナ 1,16）。それにもかかわらず、ニネベの人々にはヤハウェの名を伝えない（ヨナ 3,4）。そのため、ニネベの人々が信じる対象も、ニネベの王が言及するのも、「神（אלהים）」である。ヨナは船員たちに「ヤハウェ」の名を（結果的に）伝える際に、「私は、海と陸をつくった、天の神ヤハウェを恐れる者だ（אֱת־יְהוָה אֱלֹהֵי הַשָּׁמַיִם אֲנִי יָרָא）（アッサー・エツェア・アッ・エー・エー・エー）」（ヨナ 1,9）というヤハウェに関する説明と自身の信仰告白を付加している。ここから、ヨナには異邦人がヤハウェを知ることには抵抗がないことが読み取れる。ヨナが異邦人を嫌っていないことは1章の船員たちとのやり取り（特にヨナ 1,12）からも読み取れる（T. E. Fretheim, “Jonah and Theodicy,” ZAW 90 (2), 1978, p. 228）。従って、ヨナは、「異邦人」全般ではなく、「ニネベの人々」の改宗を望んでいないのである。つまり、ヨナにとってのニネベの人々の問題性は、まさに「ニネベの人々である」ということそのもの、あるいは、その暴力性（ヨナ 3,8 参照）ということになる。
- (14) このような行為の調整としての感情のプロセスは A. Inselmann, *Die Freude im Lukasevangelium: Ein Beitrag zur psychologischen Exegese*, WUNT

322, Tübingen: Mohr Siebeck, 2012 が、機能主義的心理学を応用しつつ、ルカ福音書の感情描写の理解のために提示するものである (pp. 43-45, 260-269 を参照)。すなわち、私たちはここで Inselmann のモデルをヨナ書に応用する。

- (15) この箇所は本稿が採用している訳が一般的である (Allen, *op. cit.*, p. 230 や D. Stuart, *Hosea – Jonah*, WBC 31, Waco: Word Books, 1987, pp. 498-499 を参照) が、別の訳も可能な箇所である。例えば、P. Joün P / T. Muraoka, *A Grammar of Biblical Hebrew* (Fifth Reprint of the Second Edition), Rome: Gregorian & Biblical Press, 2016, § 161b では、疑問詞 η は時には感嘆のニュアンスになると言われており、ヨナ 4,4 は「あなたは本当に怒っている! (You really are angry!)」と訳されている。同様に、西村は本稿に近い訳「あなたの怒ることはよいことであろうか」を採用しながらも、疑問詞 η を感嘆の副詞と解釈すれば、3,4 のヤハウェの言葉を「よくぞ怒った」と訳すこともできると述べている (西村、前掲書、114-115 頁)。また、Brekelmans によれば、「あなたが怒っているのは当然か?」という訳が諸注解書において見られるが、 כִּי־יָדַעְתִּי が「当然に行う」と正当に訳されるのはこの箇所だけである。それゆえ、ヤハウェのヨナへの問いを再び研究する必要があるとする。彼はヨナ書 4,4,9 におけるヤハウェの問いを「あなたは本当に怒っているようだ」、ヨナの返答を「はい、確かに、私は死まで怒っています」あるいは「はい、確かに、私は最高に怒っています」と訳するのがよりよいとしている (Chr. H. W. Brekelmans, “Some Translation Problems.” J. G. Vink et al., *The Priestly Code and Seven Other Studies*, Oudtestamentische studiën 15), Leiden: Brill, 1969, pp. 175-176)。Sasson も、ヨナ 2,4 の神の言葉を、ヨナの憂鬱の動機や誠実さ、正当化に異議を唱えることなく、ヨナの憂鬱の深さに取り組む神の反応と考えるべきとしている。彼によれば、神は不作法でも、意地悪でも、からかっているのでもなく、ヨナの絶望に同情しており、ひょっとすると、ヨナの痛みを取り除くことを願ってすらいいるという (J. M. Sasson, *Jonah: A New Translation with Introduction, Commentary, and Interpretation*, The Anchor Bible, NY: Doubleday, 1990, pp. 286-287)。それゆえ、彼は、ヨナ 2,4 を「主は言った。『あなたはすっかり落胆してい

るのか?』と訳している (*ibid.*, p. 270)。これらの意見は決して無視できるものではないが、本稿ではこの訳の検討をする紙幅がない。それゆえ、本稿では、研究の目的に合致する伝統的な訳を採用する。

- (16) 水野によれば、4,11 的 *וְאֵי לֹא אָחִים עַל־נִינְוָה הָעִיר הַגְּדוֹלָה* というヤハウエの言葉は修辭疑問文と否定文の二通りに訳せる。前者は「私は大きな町ニネベをあわれまないでいられようか」、後者は「私は、大きな町ニネベをあわれまない」となる (水野、前掲論文、4-7 頁)。この問題はここでは扱わずに、一般的な修辭疑問文を採用する。
- (17) *נחם* の用例については、J. イエレミヤス『なぜ神は悔いるのか 旧約的神観の深層』(関根清三・丸山まつ訳)、日本基督教団出版局、2014 年 (J. Jeremias, *Die Reue Gottes*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1975; 1997) が詳しい。
- (18) P. Weimar, *Jona*, HThKAT, Freiburg: Herder, 2017, p. 355.
- (19) S. T. Mann, “Performative Prayers of a Prophet: Investigating the Prayers of Jonah as Speech Acts.” *CBQ* 79 (1), 2017, p. 34.
- (20) *Ibid.*
- (21) Wolff, *op. cit.*, p. 139.
- (22) 長谷川修一『旧約聖書の謎』中央公論新社、2014 年、210-211 頁。
- (23) 同書、208 頁。
- (24) Limburg, *op. cit.*, p. 166.
- (25) Allen, *op. cit.*, p. 235.
- (26) 本節は、Inselmann, *op. cit.*, pp. 241-282 (「第 11 章 父親と二人の息子のたとえ (ルカ 15,11-32) における感情の描写と感情の変化」) に大幅に依拠している。従って、若干の筆者独自の考察を付け加えはしたが、オリジナリティを主張するものではなく、Inselmann の論考に限り、直接の引用を除いて、参照頁数を逐一指示するという手間は省かせて頂く。
- (27) Bovon, *op. cit.*, p. 45.
- (28) H. Klein, *Das Lukasevangelium*, KEK 1/3, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 2006, p. 532. また、M. Wolter, *Das Lukasevangelium*, HNT, Tübingen: Mohr Siebeck, 2008, p. 537 を参照。「語り手が兄息子を畑から帰還させることには…物語上の理由がある。ルカにとっては、兄息子が

20b-24b 節に語られた出来事を聞き知っておらず、24c 節における祝宴が始まった後に、はじめてその場に居合わせていることが重要なのである」。

- (29) συμφωνία と χοροί について、Bovon, *op. cit.*, p. 51 を参照。「兄息子はまず音楽を聞き、その次にダンサーの足踏みを耳にしたと私には思われる」。
- (30) Bovon, *op. cit.*, p. 50.
- (31) J. Ernst, *Das Evangelium nach Lukas*, RNT, Regensburg: Putset, 1977, p. 460 を参照。「呼び出された僕への質問が…すでにかすかな非難を含んでいる」。
- (32) Wolter, *op. cit.*, p. 537.
- (33) Inselmann, *op. cit.*, p. 254.
- (34) Klein, *op. cit.*, p. 533. 「非難を込めて『私には』が文頭に置かれている」。
- (35) C. S. ソン『イエス—十字架につけられた民衆』（梶原寿監訳）、新教出版社、1995 年〔C. S. Song, *Jesus: The Crucified People*, NY: The Crossroad Publishing Company, 1990〕、139 頁の次の発言を参照。「彼 [= 弟息子] のこの行いは父親に衝撃を与え、深く心を痛ませたことだろう。自身の血肉を分けた子が、父親の死を待ちきれないでいる」。
- (36) Klein, *op. cit.*, p. 533. 「連帯感なしに、兄息子は自身の弟を『このあなたの息子』と呼ぶ。彼は弟に、売春婦と共にいることで掟を犯したという罪を着せる。『怒る者』は、彼の知っている以上のことを言うものである」。
- (37) Ernst, *op. cit.*, p. 460 を参照。
- (38) Klein, *op. cit.*, p. 533.
- (39) Klein, *op. cit.*, pp. 533-534. 「完了形で語られる確認によって、父親はなぜ祝宴が始められねばならなかったのかを説明し、同時に兄息子を招待している」。
- (40) Inselmann, *op. cit.*, p. 262.
- (41) Inselmann, *op. cit.*, pp. 276-277.
- (42) Inselmann, *op. cit.*, p. 279.
- (43) もちろん、父親の最後の問いかけを確認のための疑問ではなく、宣言として理解することも可能である（たとえば、Klein, *op. cit.*, p. 526 の訳を

大川 大地／長井 隆児「あなたが怒るのは正しいことか」

参照。“Es war aber richtig, zu feiern und sich zu freuen”). どちらも意味に大きな違いはない。